

ドレミの歌

一オクターブの音階のそれぞれの音には「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」という名前がついていますが、この名前はどのようにしてつけられたのでしょうか。それは、教会で歌われる讃美歌の歌詞からとられました。「グレゴリオ聖歌」の中に、バプテスマのヨハネの誕生を記念して歌う聖歌があるので、その歌詞のそれぞれのフレーズの最初の音が順々に音階を登っていくように作曲されています。それで、それぞれの音をその歌詞の音節「ウト・レ・ミ・ファ・ソ・ラ」で呼ぶことになったのです。「シ」は「サンクテ・イワネス」（「聖ヨハネよ」）の「サンクテ」（「聖」）から「S」を、「イワネス」（「ヨハネ」）から「I」をとって組

み合わせたのです。「ウト」が「ド」となって、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」が出来上がりました。

現代の楽譜は「五線」の上に書かれますが、グレゴリオ聖歌は「四線」の上に書かれました。この四線譜は十一世紀にグイド・ダレッツォという修道士によつて確立されました。「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」もダレッツォが作ったと言つてよいかもしれません。

「ド・レ・ミ」は音楽の基礎ですが、その音楽の基礎が、神をほめたたえて歌う讃美歌と共に作られていったというのは興味深いことです。音楽の好きな人はきつと讃美歌も好きなことと思います。讃美歌にまさつてわたしたちの心を慰め、励まし、生かしてくれる音楽はありません。時代が変わつても、何十年、何百年と歌い継がれている歌、また世界中

のどの地域でも、どの年代の人にも愛されている歌は、讃美歌の他にはないと思います。なぜ、讃美歌にはそんな魅力があるのでしょうか。それは、讃美歌のひとつひとつにストーリーがあるからです。この欄でいくつかの讃美歌をとりあげ、それを紹介していきたいと思います。皆さんが讃美歌に親しむ、教会でごいっしょに、心を込めて歌うことができたら、うれしく思います。

栄光の賛歌

キリスト降誕のとき天使たちは「栄光が、いと高きところでは神にあるように」（グロリア・イン・エクセルシス・デオ）と歌いました。これと同じ言葉ではじまる賛歌が「グロリア」（栄光の賛歌）です。この賛歌は初代教会から今に至るまで歌い継がれています。

この賛美が、天使たちが歌った言葉で始まるのは地上の賛美の歌声が天で絶え間なく歌われている神への賛美に融け合うようにとの願いを表わしています。続いて「われら、なんじを誉め、なんじを讃えず。なんじを拝み、なんじを崇める」と歌いますが、礼拝を表わす言葉をいくつも重ねて、神への敬愛を表

わしています。キリストが「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」と言われたことにこたえようとしていなのです。

神を賛美した後、「世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ」と歌って、キリストのあわれみを求めます。「アニユス・デイ」（神の小羊）という賛歌ではキリストを「世の罪を除きたもう神の小羊」と歌いますが、「グロリア」でも同じように、全人類の罪を背負って十字架で贖罪をなしとげてくださいましたキリストを覚えるのです。このキリストの恵みなしには、わたしたちは神を「あなた」と呼んで近づくことができないからです。

そして、最後に「あなたこそ聖、あなたこそ王、あなたこそ至高のお方。イエス・キリストよ、あな

たは聖霊とともに、父なる神の栄光のうちにおられます」と歌います。初代教会は、自らを至高者としたローマ皇帝から迫害を受けました。しかし、教会は、キリストこそ至高者であると告白し、そのことを高らかに歌い、それによって迫害に打ち勝つたのです。讃美歌はどれも、神への信仰の告白として歌われるのですが、栄光の賛歌は、その中で最も力強い信仰告白の讃美歌だと思います。

「試し読み」はここまでです。

お気に入りでしたら

ご注文ください。



Penguin Club

www.penguinclub.net